

令和7年度 第1回横須賀市学力向上推進委員会 議事録

1 日時 令和7年7月23日(水) 15時00分から16時30分まで

2 場所 横須賀市教育研究所 第2研修室

3 出席委員

笠原委員・西野委員・石井委員・安藤委員・太田委員

宇佐美委員・山本委員・村上委員・小日向委員

4 事務局

学校教育部教育指導課 鈴木課長 渡辺主査指導主事 石橋主査指導主事

黒澤主査指導主事 東指導主事 大田指導主事

5 傍聴者 なし

6 議事内容

(1) 委員長選出

学力向上推進委員会条例第3条の規定に基づき、委員の互選により笠原委員が委員長に指名された。その後、条例第3条3項の規定に基づき、委員長が委員長職務代理者として西野委員を指名した。

(2) 諮問

教育指導課長より、次のように諮問があった。

■教育指導課長

学力向上推進委員会委員長 様

下記に掲げる事項について、貴委員会のご意見を賜りたく諮問いたします。

1 諮問事項

現行プランの成果と課題を踏まえた次期「横須賀市学力向上推進プラン」（令和8年度から令和11年度）において目指すべき「学力」と、新たな重点目標及びその指標について

2 趣旨

本市では、児童生徒の確かな学力の定着を図るため、令和4年度から令和7年度までを計画期間とする「横須賀市学力向上推進プラン」を策定し、次の3つの目標を掲げて取り組んでまいりました。

「現行プランの3つの目標」

目標1 学びあう集団の育成を図る

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

目標3 学力層全体の引き上げを図る

これらの取組を通じて、目標1・2については、教師の指導改善への意識や児童生徒の主体的に学習に取り組むことへの意識が高まるなど、一定の成果が見られました。一方で、目標3に関しては、全国学力・学習状況調査における本市の平均正答率が全国平均に届かない状況が続いています。

現行プランの成果と課題を踏まえ、令和8年度から令和11年度までの4か年を計画期間とする次期プランを策定するにあたり、①今後、本市が目指すべき「学力」とはどのようなものかを明確にするとともに、②新たな重点目標の設定及び③次期プランの進捗管理に相応しい指標について、貴委員会の専門的かつ幅広い知見からご助言いただきたく、ここに諮問いたします。

■委員長

先ほどの課長のご挨拶にあったように、平成25年度4月に条例設置で横須賀市の学力向上推進委員会がスタートした。そのときの学力と、当然今の学力とは、様々な状況が変化している中で、改めて見直していかなければならないということが、ここで明確に示された。では、具体的に横須賀市が目指す学力は、どういう学力なのかということこれから議論していくが、それは非常に責任が重いことである。これからの取り組み、そして、「今後」をどこまで視野に入れるのか、これだけ変化が激しい中で、何年耐えられるのかわからないが、次のプランとしては令和8年から4年間ということになっている。とはいえ、目指す学力は、短期的に変化するものでもない。委員の皆様方のこれまでの知見も踏まえて、横須賀市にとって、どういう学力を目指すべきなのかということをご意見いただきたい。同時に新たな重点目標の設定と、次期プランの進捗管理に相応しい指標という非常に多岐に渡って、今のプランを見直していかなければならない。建設的に進めていきたいと思っている。

(4) 説明事項

事務局から、次のとおり今年度の学力向上推進委員会の取組について説明し、質疑応答を行った。

■事務局

令和7年度の学力向上推進委員会の取組について説明する。先ほど当課課長鈴木より諮問を行った。諮問文にあるとおり、次の3点について協議をお願いする。

1点目は、「横須賀市が目指すべき「学力」とはどのようなものを明確にする」ことである。現行の学習指導要領には「学力」という言葉は使われておらず、「資質・能力」の育成という視点に転換されている。一方、このプランでは、「学力向上」を推進するものとして各学校に発信してきた。次期プランを策定するためには、この「学力」をどう捉えるのか議論する必要があると考えている。

2点目は、新たな重点目標の設定に向けてご議論いただきたい。現時点で、

目標1及び2については、一定の成果が得られたと捉えている。一方で、目標3に掲げた「学力層全体の引き上げ」については、課題が残っている。これは、先ほどの「学力」をどう捉えるのかということと関連していると考えている。本市が目指す「学力」の視点から、改めて目標を見直し、全ての教員が同じ認識で取り組める目標を設定したい。

最後に3点目。現行のプランでは、1つの目標に対して複数の指標があった。このことによって、様々な角度から目標を分析することができたが、その一方で成果と課題が定まりにくかったり、分析に時間を要してしまったりもした。また、日常の教育実践と分析結果結びつけるのが難しいという課題もある。そこで、次期プランの目標指標については、進捗管理に相応しい指標にし、その内容と指標の数も含めて設定し直したい。

■委員長

今の説明に対して、確認を含めて質問はあるか。

■委員長

では、私から確認したいことがある。先ほどあった3点目のところで、「実践と結びつけるは難しかった」とか「成果と課題が定まりにくかった」という説明があったが、もう少し詳しく具体的に補足してほしい。

■事務局

現行のプランは、1つの目標に対して指標が複数ある。先ほど説明した通り、様々な視点でその目標を捉えることができるようにしている。しかし、この指標では成果があった、この指標では課題があったというようなことが起きたときに、目標が達成できたのかどうか迷ってしまうということがあった。また、分析することが多いとその分、分析にかかる時間も多く必要となる。そうすると、その年度内に具体的な対策や取組をすることも難しかった。調査・分析をしたその年の中で、具体的な実践ができるようにしていきたいと考えている。

■村上委員

基本的には市学習状況調査の質問項目でこの成果を測っているが、質問項目以外のことを指標とすることは考えていないのか。

■事務局

今、考えているのは質問紙調査の調査結果を中心に分析するというのである。

■村上委員

目標2の「粘り強く学ぶ力の育成」を、普段の授業の様子や、子どもの様子から捉えると、これまではちょっとしたことで諦めてしまっていた子が、粘り強く努力して、ノートの前ページに戻るなどして、何か手がかりを探そうとしているなど、成長を感じることもある。そういう成長の姿を学習状況調査の質問項目1つで評価するというのは、やはり難しいだろうという印象を受けた。そのような子どもたちの成長に、繋げられる見方があるとよいと考えている。

■委員長

「学力」をどう定義するかというところから議論をスタートして、その中でどういう子どもの姿を見取るのかという場合に、現行で扱っているそのバックデータを十分に生かし、それで十分に対応できるかどうかというところが難しい。この先、質問項目ではなく違うものにした方がよいのではないかという意見が委員の中から出た場合には、そうした対応は可能か。

■事務局

現在行っている市の学習状況調査は、教育委員会が独自に質問項目を作成して実施している。そのため、今年度のこの委員会の中で「こういう質問だったら粘り強さをしっかりと調査できるのではないか」という意見をいただければ、独自質問を変更したり、追加したりして調査することは可能である。市の

学習状況調査は引き続き活用するが、新たに別の形の調査を学校に依頼するのではなく、できる限り今のものの中身を変えたり、追加したりして調査していくという方向で考えている。また、質問内容だけでなく、選択肢もこちらで作成することができるので、質問紙調査を活用するという方向である。

■委員長

先ほど話にあった「進捗管理にふさわしい指標」について、質問項目の内容や、その項目の数についても新たな形で実施できるという理解でよろしいか。

■事務局

そのとおりである。また、現行のプランについては、できる限り同一集団を追った方がいいだろうということで、小学校4年生から5年生の変化、中学校1年から2年の変化からそれぞれ分析してきた。しかし、調査・分析をしても、その年の学年で終わってしまうということがある。また、市全体の成果や課題についても捉えにくいという意見もあった。そういった調査対象についても、どうすればいいのか、ご意見いただきたい。

■西野委員

この目標3について、今日の議論と関わってくると思うが、目標3にある「学力層全体」の「学力層」というのは、どういうことを指した言葉なのか。元々どのような定義を持って、目標3を設定したのか。

■事務局

学習状況調査等が出てきた教科調査のポイントをそれぞれの層に分けて捉えている。そして、目標1と目標2に対しては具体的なことを示しているが、それは、目標1と目標2を達成することによって目標3に掲げる教科調査のポイントも上がるのではないかとという仮説のもとに取り組んできたためである。しかし、今回の委員会の中で、「学力」そのものの捉え直しをしていくため、協議の中で学力層という言葉が相応しくないのではないかとということや、そもそもこの目標3に「学力層」を掲げているのは相応しくないのではないかと検討

されることも考えられる。

■委員長

他に質問などはないか。1年間の中でどういうことを議論していくのか、まずは、「学力」ということを考え、そのイメージをこの時点で持っておきたい。現時点で何か気になることがあれば、この場で共有し、それらを踏まえながら、今日の協議題である学校教育について話をしていきたいと思っているが、どうか。

■太田委員

2つ質問がある。まずは、諮問にも書いてある「一定の成果」について具体的なことを教えてほしい。次に、事務局が「目標1と目標2が達成すれば、目標3、いわゆる「見える学力」つまり、調査の結果が上昇するのではないか」と言われたが、本当に因果関係があったのだろうかと気になっている。私は、本校に今年赴任したが、学習状況調査の結果を全部調べてきた。本校は、市内でいわゆる「見える学力」が高い学校である。全国学調の結果に比べて10ポイントはいかないが、国語も数学も高い。この結果を3年分調べた。目標1、目標2について、同一集団で中1から中2の値がプラスになったのは、令和5年度では一部だけで、あとはマイナスだった。しかし、全国学調では、数字はあまり言わない方がよいかもしれないので、ここでは具体的には言わないが、いわゆる全国平均より10ポイント以上上回っている。目標1と目標2については、マイナスである。本当に、目標1・2と目標3に因果関係があったのか、もう少し事務局の見解を聞きたい。

■事務局

目標1と目標2について大きくポイントが上昇した学校に聞き取りの調査を行った。聞き取りを行った学校については、授業の導入の仕方や、授業の中で実際に子どもたちと向き合っているのかなど、具体的にどのような授業改善が行われているか、それに伴い、先生方の意識がどう変わっているかが分かった。この先生方の指導改善に向けた意識が高まっているということも成果の一つと捉えている。

目標1・2と目標3の因果関係については、先ほど申し上げたとおり、必ずしもあると言えない結果となった。そのため、この委員会の中で具体的に次期プランの目標やその指標についてもご検討いただきたいと思っている。

■事務局

補足すると、令和4年から7年までのプランをつくるという、いわゆる令和2年、3年に次期プランをどうするのかということ、私たちは当時、話し合っていた。以前のプランは、いわゆる目標3の全国平均値に到達することを第1に掲げていた。やはり、その頃から私たちはテストの点数だけで測るのが「学力」ではないと考えていた。そのため、これからの時代、友達と協力したり、自分が設定した課題に向かって粘り強く取り組んだり、いわゆる非認知的な力というのも非常に大事になってくるだろうと考え、それを学校教育の中でプランの目標として掲げて目指していくべきではないかという議論を行っていた。そのため、目標1、目標2は、いわゆる非認知的なところであるとか、いわゆる資質・能力ベースの部分に掲げた。ただ、行政が策定するという視点から、一般の市民の方たちが捉えやすい目標も必要であろうということで、学力調査の結果は外せないのではないかと、当時議論になった。そうした中で、策定したプランである。因果関係があったかどうかということよりは、先生方に大切にしてほしいことを目標1、目標2として掲げたので、私達の中ではそのような仮説となった。

■委員長

ここに時間を割いていると本題に入れませんが、私から1点。今、こうして皆さんのお話を伺っていくと、事務局からは4回目の会議の中でこれを整理してほしいという案が示されており、第1回は「学力はどういうものなのか」、そして2回目は「重点の目標と進捗管理に相応しい指標」、3回目次期プラン、4回目も同じであるが、果たして、大体1時間半の話合いの中でそれが可能なかどうかというのが、今の話を伺っていても非常に不安である。このスケジュールでやると出来レースになってしまう可能性もある。要は、十分に考えを引き出せないままに、「とりあえずこれで整理しましょう」となってしまうと、私たちが集まってきている意味がないし、ここで決定したことが令和8年から11年までの横須賀市の指標になっていくことを考えると、ある程度我々もきちんと議論を重ねる必要がある。これは私からの提案であるが、委員

の皆さんがお忙しいことは重々承知の上で、あと1回会議を増やしていただけないか。委員長としても、次期プランを4回でまとめ上げていくのは、かなり難しいと感じている。また、委員の皆さんたちに「宿題を出して、それを事前にやっていただく」というような形になっていくと思う。そう考えると4回では、なかなか難しいのではないかと思い、1回会議を増やすことを提案したいのだが、どうか。

■西野委員

やはり、最初にある「学力とは何か」を今日だけで決めることは難しいだろう。このことが前提になると思うので、会議を1回増やしてでも丁寧に議論した方がよろしいのではないかと思う。

■委員長

他の委員の皆さんも同じ思いということでよろしいか。

■委員長

それでは事務局に提案である。あともう1回、どこで増やすかは、今後6ヶ月であるが、5回で会議をしていくと考えながら、今日の会議も進めていきたい。会議を1回増やすという方向で了解していただけるか。

■事務局

承知した。

■委員長

それでは、そのように事務局から回答があったため、会議は5回ということを進める。資料3と資料4についてはこれで、よろしいか。

■委員長

それでは本日の今後の協議事項である「横須賀市が目指すべき学力とはどのようなものか」について協議入る。事務局から、特にこの件についての説明や補足はあるか。

■事務局

先ほどもお伝えしたとおり、やはり「学力」という言葉は、現行の学習指導要領上では使われていないので、資質・能力の育成という視点からご議論いただきたい。当課でも「学力」を知識や技能の量だけではなく、自分で考えて、そして判断し表現する力、主体的に学びに向かう気持ちや、他者と協力する力など幅広い力であると捉えている。このような総合的な力は、学力テストだけでは測り切れないものが多くあると考えている。そうした中で、委員の皆さんが考える「学力」に対するイメージ、実際に本市の先生方が「学力」または「学力向上」と聞いてイメージしていることなどを、また、学識経験者という立場から「学力」を議論する際に、留意すべきことをぜひご示唆いただきたい。

■委員長

今、事務局からあったように学習指導要領の中で、「学力」という言葉は消えて、「資質・能力」という言葉にかわってきたのには、実は変遷がある。平成20年告示の学習指導要領でも「確かな学力」というのが前提になって、今回の学習指導要領では資質・能力となっている。そのため、最初から「学力」がなかったわけではなく、時代背景もあり、そもそも「確かな学力」というところからスタートして、今の資質・能力になっている。その背景には基礎調査の結果であるとか、いろいろなことが影響している。資質・能力ベースで意見を欲しいということが事務局からあったが、まずは、あまりそれに捉われずに、それぞれの立場でご発言をいただきたい。

■石井委員

「学力」ではなく「資質・能力」ということについては、やはり子どもたちの「生きる力」ということになるだろう。例えば、現行の通信簿にある丸とか三角という評価ではなくて、もし今後その資質・能力の部分で、評価をすると、どういう評価になっていくのか、ということも考えていかないといけない

のだろう。もう一点が、私もPTA活動を10年以上やっているが、その中でどうしても地域の方たちとの接点というか、私が小学校でPTA会長をしていたときにも、地域の方たちとの集まりがあったが、そういったこともだんだんなくなってきている。その中で、地域の人たちが一緒にコミットするとか、一緒になって子どもたちを育てるといふことも考えていかなければならないだろう。もう一点が、ITやAI。横須賀市でも一人一台端末の持ち帰りが始まった。私の子どもは今年5年生であるが、子どもは学校が求めていることに対して、十分に対応できていないと感じている。実際の現状は、子どもたちが持ち帰ってきて、とりあえず宿題はやっている。その中で、学校から端末を持ち帰るといふことは、ネット環境に繋がることになるが、そういったことに対しても、どう評価するのかということも考えていかなければならないのだろう。私達は保護者としても忙しく、学校から届くものに、追いついていけないときもある。先生たちもそうだと思うが、特に家庭は、もっと追いつけていけない。学校からの情報などをどうやって家庭に伝えていくのかも聞きしたいし、考えていきたい。また、先ほど委員長も言われたように、検討することが多岐にわたるので、しっかりと「どれとどれとどれ」ということを考えていかないと、考えることたくさんあり過ぎて、全てが中途半端で終わってしまう気がする。そこも踏まえて、1年間いろいろと議論をさせていただければと思っている。

■委員長

もう既に次期学習指導要領の議論が始まっている。ようやく今の学習指導要領が学校に少しずつ定着し、馴染んできたが、もう次の学習指導要領が検討されている。そのようなサイクルだと、地域になかなか伝わっていかない「学力」となり、これがまた難しい。いかがでしょう。

■安藤委員

私は今年から、この委員会に参加させていただいているが、事前に送付された資料から感じたことは、先ほど太田委員からもあったように、目標の3と目標の1・2が少し乖離しているということである。現状として、やはり目標1と2については、先生方の授業づくりに関することが非常に大きい。私は昨年まで長く教頭として関わっていた。教頭は、スパンが短めにいろいろな学校に勤務をして、校内を見ている。その中で、やはり現行の学習指導要領になって

からは、先生方の授業のスタイルが大分変わってきている。子どもたちが問題解決的な学習に取り組みながら、子どもたちの対話で、グループで、というような学習の形態にして授業改善を目指している先生方が大変多くなってきた。そういった意味では、横須賀市が進めていこうとしている「授業改善」は、よい形で末端のところまで浸透しているのではないかと実感している。そのため、先生方ともそういう話をしながら「問題解決と、主体的な部分っていうのを意識してやっぺいこう」ということを伝えると、先生方もそれを理解しながら、授業づくりに取り組んでいる姿を見てきた。

ただ、残念ながら目標3の結果については、結果の良し悪しに目が行ってしまふというのが正直な思いである。そのため、この「見える部分」をどのように上げていけばいいのかというのは、私にとっても、実は喫緊の課題である。今、話題になっているように目標1と2を絡めながら、目標3を上げていくということについて、どうすればいいのだろうかとも私も考えていたので、太田委員が話されていたことには同じ思いをもっている。そのため、やはりこの目標3のいわゆる「見える部分の学力」をどのように上げていったらいいのか、例えば、九九をどのように定着させたらいいのかというような、本当に基本的なことになってしまう。そういうこととともに、やはり私が考えているのは「問題解決力」と、「自分をアウトプットする力」この辺りが大きな「学力」になってくると思っている。ここを育成したいと思いながら、自分も授業をしていた。ただその中に、これも先ほど出てきたが、横須賀市は、今年から新しく端末の持ち帰りを始めたので、それをどのように生かしていくかという段階に入った。このことについては、西野委員のお得意の分野だと思うので、ぜひアドバイスをいただきながら、横須賀市としてそれをどう活用して、この「見える部分」にどうアプローチできるかということは考えていきたい。

■委員長

今回は目標についても、目標1・2・3がありきではなく、ここも見直していくというようなことも含め、どのような目標が相応しいのかということも議論していかなければならない。この「目指す学力」というものが、形あるものになってきたため、そこからどういう目標なのかということを考えてたい。ただ、今、委員の皆さんからいただいている中にある要素をきちんと抽出できるかどうかということが非常に課題であるため、ぜひ、いろいろな意見を言っぺいいただいて、皆さんたちがどのようなことを考えているのか、どのようなことを横須賀市の子どもたちに「力」として付けさせていきたいのか、まさにそれ

が「学力」ではなくて「資質・能力」となるため、例えば、校内研究などで、研究テーマに資質・能力を絡めていることがあれば、話をしてほしい。

■小日向委員

外国語では、コミュニケーション能力の育成が目標の一つである。コミュニケーションをするための、いろいろな要素の中の一つが知識であったり、技能であったりするわけで、それだけ習得しても、正しい人との関わり方であるとか、自分の出し方であるとか、相手を理解する力など、そういう姿勢がなければ、知識や文法力がどれだけあっても、よい人間関係はつukれないという話を子どもたちにしている。このよい人間関係はつくる要素の一つとして、いわゆる「学力」ということが必要になってくると思う。

■委員長

公立小・中学校の使命の一つに、基礎的学力を定着させるということがある。これは重要な役割の一つであるため、小学校の6年間、中学校の3年間でこれを身に付けさせて、小学校6年生と中学校3年生を卒業させていくというのが、義務教育の役割として課せられている。だから、基礎的基本的な学力という、例えば知識・技能であったり、表現力であったりということは、欠かせないことである。しかし、それはなくていいのかという議論はならない。今は小日向委員もおっしゃったように、その資質・能力を育てていくためには、一定の知識や技能も、当然必要になってくる。しかしながら、それが前面に出てきていた時代から、それはそれとして、さらに子どもたちが持っているよさなどは、一人一人違うので、その力をどうやって引き出していけばいいのかという辺りに視点がシフトしてきている。この会議では、まとめる必要はないので、ざっくばらんに思っていることをご発言いただきたい。

■山本委員

本校は、昨年度から「主体的に学び合い、全員が活躍する授業の工夫」というテーマで学校研究をしている。その中で先ほど安藤委員からあったように、子どもたちに付けさせたい資質・能力は、まず「アウトプットする力」である。それと、先ほどから自分が見ていたのは、現行のプランの目標1で、「学び合う集団の育成を図る」の中にある文言に、「互いの意見を尊重し合いなが

ら協働し、学びを深めていける」という部分をもう少しわかりやすく先生方に伝え、子どもたちを育てていけないものかということである。やはり、アウトプットする上では、自分の意見なり、考えなりを話していくということを大事にしてほしい。その上で他の意見を聞いて、様々な気付きを持つことや、全然アウトプットできなかった子が、他の意見を聞くことによって、自分の考えを確かめたり更新したり、そういうことが「子どもが学びを深めていく」ということに繋がるのだろう。それにはやはり「協働」が必要である。それは横須賀市に限らないことだと思うが、学校教育の中では今後も大切にしていかなければいけないと考えている。そこにアウトプットするための何か、「個別最適な学び」の部分ではあるが、一人一台端末の話の中でもあったように、個別で学べる部分も含めて考えられるとよい。まだ、自分自身で考えが全然まとまっていないが、そういった部分が「学力」としての「協働的な学び」というか、得点と学びを深めるという部分で、今後求められる学力とか、横須賀市で大切にしたい学力ということに繋げてキーワードが見出せるのではないかと考えている。

■石井委員

先ほど、委員長がおっしゃった「一人一人の子どもたちと向き合って一緒にやっていく」ということについて、家庭と学校との関係性を考えると難しいことがある。まずは、なかなか家庭のことにまで学校が立ち入れないという現状がある。しかし、この議論には「家庭も」という視点も必要だと思う。「家庭教育」について今は、先生たちも各家庭に言いにくかったり、子どもたちに対しても言えない部分が多くあったりすると思う。しかし、私は、もっと学校から「家庭ではこういうことをちゃんとやってくださいね」くらいのことを言っていないと、せっかく学校でこのようなよいことをやろうとしても、そもそも家庭と学校との連携がうまくできてないと、きちんと子どもたちにも行き渡らないのだろうと思っている。特に今、いろいろな保護者の方がいて、保護者会の中でも、先生たちは家庭に気を遣っている。そして、子どもたちにも気を遣いながら先生方は仕事をされている。しかし「家庭ではこういうことをやってくださいね」という指針を出していただきながら、「学校ではこういう勉強しているから、家庭でもこういうことをちゃんとやろうね」ということを学校と家庭と両方で子どもに伝えていかないと難しい。学校の中で、しっかりと取り組んでいても、家に帰るとルールが守れないことや、家に帰ると今は、スマートフォンとかゲームとか、魅力的なものがたくさんある。学校で折角よいこと

を学んでも、家庭に帰ったときに、それが生かされないことがあると思う。そのため、家庭向けのものを発信していただけると、「学校が子どもを育てる」だけではなく、やはり「家庭も子どもを育てる」ので、保護者と先生と一緒にやって取り組まないと、なかなか無理なのではないかと感じている。

私にも子どもがいて、しっかり育てて欲しい、しっかり大人になって欲しいという思いがある。そのためには、家でしっかりとルールをつくって、しっかりと過ごしながら、学校に行って勉強してほしい。ただ、全ての家庭がそうではないだろうし、私もPTAという立場だから、そのような気持ちにもなっているのかもしれない。横須賀市には今、2万人くらいの児童生徒がいて、その2倍近い保護者がいる。その保護者まで伝わるものを発信してもらえるとありがたい。なかなか難しいとは思いますが、それがお願いというか、そういうものがあるとよいと思う。

■委員長

今年度、小学生の保護者向けの新しいリーフレットを配付したが、それは委員の方々には配付しているのか。

■事務局

今年の委員には配付はしていない。

■委員長

昨年度、この委員会の中で家庭向けのリーフレット見直し、リニューアルした。リーフレットを用いて、家庭に対してメッセージは配信しているが、全ての家庭へ配付しているというわけではない。ただ、このリーフレットについては重要なことであるので、委員には共有してほしい。そして、子どもにとって、学校も居場所であるが、もちろん家庭があつて学校があるという、どちらにも安心する場所があるということが大切で、そういうことも含めて考えていかなければならない。そして、それは学校だけで出来ることでもない。この後でもよいが、今回の委員の皆さんに、情報を共有してほしい。

このリーフレットは、インターネット上でも見ることは可能なのか。

■事務局

その通りである。また、リーフレットは、今印刷して配付する。

■委員長

新しいリーフレットは、工夫してつくっているのだから、そのあたりも含めて確認してほしい。

■太田委員

今日、この委員会に来る前に、本校の先生方にインタビューしてみた。「学力って何ですか。」と率直に聞いてみた。初任者、若い先生、ベテランの先生に聞いてみた。特に気になった「知識」という言葉は出なかった。「知識」を学力としては、言わなかったのである。「学力」というこの漢字二文字を一般の人が捉えたときに、知識が学力だと思わないだろうか。例えば、「漢字を書ける」とか「漢字を読める」とか「簡単な計算ができる」とか、そういった基礎的基本的な知識については、本校の先生方は言わなかった。一方で、先生方が言っていたのは、いわゆる「生きる力」や「生きぬく力」であった。「もっと具体的に教えてほしい」と聞いてみると、判断力、行動力、コミュニケーション能力、主体性、意欲という回答だった。また、私が期待したのは、「課題を見出す力」である。生きていくときに必ず直面するのが、解けない問いとか、難しい課題である。そうした場面でどうするのかということはとても大事である。そのときに、知識が生きるし、判断力、表現力としての聞く力、コミュニケーションができるのだろう。そして、先生方からの回答に「問題発見解決能力」ということを期待していたが、残念ながら今の段階では出なかった。

次に「では、本校の生徒に足りない力って何だろう。それが身に付けなければならぬ学力ではないのだろうか」という質問をした。そうしたら、先生方は「本校の生徒は、知りたいとか、やりたいとか、できるようになりたいという意欲が少ないと思う」と答えた。意欲の向上が一つの目指すところなのだろうと感じた。他には、「言われたことはできるけど、主体的に動くことが少ない」という答えもあった。受動的であるということや、主体性に関わることだった。それとともに、本校の生徒の「何かよいところはどのようなことか」と

質問をしたら「仲間とともに学ぶことが大好き」ということだった。これは多分、小学校からの積み重ねで、協働性が高まってきているということだろう。だから、今までの学力向上推進委員会で推してきた「粘り強く」とか「仲間とともに」とか「一緒に考えることが好きだ」ということはできていると思う。明らかにそれは、小学校6年間も含めて積み重ねていると思う。だから、仲間との協働性の高い学習が大好きである。そのようなことを先生方が話してくれた。

次に私は、3校、4校の勤務経験がある先生にも聞いてみた。市内の多様な地区での経験がある先生に「本校は、学力が高めの学校と言われているが、かつての学校と本校との違いは何か」と聞いてみた。ここでいう「学力」とは見える学力のことである。すると、まず出てきたのは、保護者や地域の教育力が違うということだった。そして、保護者の話し方や保護者の理解力だった。そして、言いたいことを言える環境、言いたいことを言って否定されることもあるが、一定数が受け入れる素地があるという集団性、そういったことが本校では強いということだった。きつく、強く攻撃するような子がいる学校に勤務していた先生は、「その学校の子どもたちは言いたいこと言えなくて、間違えられなかった。そのような集団、中学校だった。」と話し、「それでは学力は伸びない。」という言い方をされていた。

私はやはり、「問題発見解決能力」を学力としていきたいと考えている。そして、判断力。判断力を付けるには、様々な体験や経験が必要で、問題発見解決能力と判断力が、それから必要な学力になると思っている。もちろん、基礎基本的な知識は大事も大事である。

■事務局

太田委員に質問してもよいか。今の話の中であった、言いたいことが言えるというのは、「生徒が、言いたいことが言えるクラス」ということでよいか。

■太田委員

その通りである。本校の生徒は、間違いをあまり恐れないのだろうと感じている。例えば、先日、授業中に水筒を落とした子がいた。次の瞬間、前の生徒がその水筒を拾おうとした。すると、横にいた生徒が「自分で拾いなよ」と言った。水筒を落とした子は「ごめん、ごめん」と言って、前の生徒も「はい、

どうぞ」と言って水筒を渡していた。私が見た、その一瞬の授業中の場面ではあるが、そのときの先生はニコニコして、生徒たちに言いたいことを言わせていた。「いや、みんな間違えてないね」と、普通に言える環境がある。そして、誰もが優しく「そうだね」と思っている。多くの場合は、「自分で拾いなよ」と言った時点で、「そんなこと言わないでよ」となる。しかし、その時は、「ごめん、ごめん」と言って、何事もなかったようにしている。それは一瞬の出来事だったが、本校はそういう風土があるのだと思った。授業中のほかの場面で間違えても、「間違えているよ。ここじゃないの」と普通に言って「そうだね。」と自然と受け入れている。これが、私がこれまで勤務していた学校との決定的な違いであると感じた。教師がそこで、生徒同士のやり取りを遮るのではなく、生徒同士で解決できてしまう。これは「質が高い」と感じたエピソードの一つである。

■委員長

学校の風土というものは、なかなか一朝一夕で出来るものではないとすると、太田委員の学校では、これまで何を大切にしながら、そういう風土をつくってきたと考えているか。

■太田委員

私は、小学校段階からだと考えている。本校は一小一中なので、小学校がそういう雰囲気なのだろうと思う。小中一貫の絡みで、この前一週間、中学校の先生に「小学校の様子をみんなで見に行こう」と呼びかけ、そのことを小学校にお願いした。そして中学校の先生が1週間に1回か2回、小学校の様子を見に行った。そうすると、子どもは人懐っこくて、もうニコニコして私たちの周りに寄ってくる。そして、小学生と先生の関係性を見ていると、先生方がとても温かい雰囲気だった。クラス的人数が少ないのもあるかもしれない。そういう余裕のある環境なのかも知れないが、そういう環境で過ごした子どもたちが中学校に入学してくる。そして、本校で5～6年くらい朝の10分間の帯で取り組んでいる「シンキングタイム」というものがある。答えのない問題を毎日10分間、3～4人で考えて1週間取り組む。そして、自分なりの答えを見付けるといえるものである。例を話すと長くなってしまうので、差し控えるが、そういうことをやり続けている。10分間だけ毎日そういうことを続けている環境が、その風土を生んでいるのかもしれない。

■委員長

今の話は大変興味深く、いくつかのヒントがあるのだろうと感じた。

■小日向委員

最初に、太田委員の学校の学調の結果を聞いたとき、私の勤務校とは真逆であると思った。私も本校の学調の結果を改めて確認してきたが、グラフを見ると、本校は「主体的な学び」とか「総合」とか「道徳」といった項目は、よい数字である。一方で、教科の結果については、あまり芳しくない。市内でも地域によって全然違うということは聞いていたが、それを実感した。本校の子たちは、すごく前向きで、例えば総合などの課題解決学習については、ものすごく一生懸命取り組む。まるでスポンジのようにどんどん吸収するが、その一方で知識とか、そういう基礎学力と言えればいいのか、そこが足りないことを実感している。今、学校研究のアドバイザーで入っている大学の先生からも「課題は、やはり知識のところを補っていくことではないか」と、最近言われ始めている。しかし、太田委員と同じように「学力」というか、何を育てたい力とするかと考えると、私も「生きる力」であると思っている。そのために、本校で補わなければならない部分は、知識。主体的な学びを実現するために、やはり知識だとか、足りないことを補わなければならない。太田委員の学校では、使うものをいっぱい持っていて、そこに対してそのモチベーションとか、その課題を見付ける力など、それをつくっていくことを補っていくということなのだろうと思った。つまり、一言で「学力を上げる」と言っても、学校や地域によって状況が違うので、「学力」よりももっと大きな上のところにある「生きる力」として捉える必要があるのだろう。また、子どもによっても違うし、それこそ、環境や家庭も違う、その子の能力も違う。その子が大人になったときにどれを補えばいいのかということを私たち教員は、一つのクラスにいても「あなたのこの部分を上げたいな」とか「あなたはこういうことができるから、ここの部分をさらに上げてあげたいな」というよう思いで子どもたちと関わっていると思う。だから、学力を上げるためには全部必要であるが、もっと大きな視点が欲しい。それを横須賀市の先生、子どもたち、保護者、地域の方々と共有できる「合言葉」のような言葉があったら素敵だと思う。

私は横須賀に来て7年目になるが、その当時は学力状況調査の結果がものすごくフォーカスされていると感じた。「学力」は今、議論になっていたような

課題解決に対することであると言われてきているが、五教科の先生、特に三教科の先生が、公立入試の合格できるかということをしごく聞かれたり、言われたりする。それはそれで大事ではあるが、何かそこにフォーカスされがちになってしまうのは、「学力」という言葉が非常に狭く捉えられてしまっていて、かなり強く印象づけられてしまっているということもあるのだろう。私が横須賀に来たときに、公立高校を受験する生徒が多いということも気になっていた。だから、「学力」という言葉を変えたいという思いもある。教員はもちろん、意外と若い人たちはそう思っていないかもしれないが、もしかしたら保護者や年配の方は、「学力」という言葉で「資質・能力」とは思っていないし、「生きる力」とは感じてないだろうから、ここから多くの方に「届ける言葉」を変えていきたいと思っている。

■委員長

やはり学校現場にいる方々は、「この子は」と言ったら、一人一人の子どもたちを見て、その子どもたちがどうしたら力を伸ばしていけるのかということに、最終的にはしごく心を砕いていらっしゃる。そこには、基礎的基本的な知識があり、資質・能力の視点もある。そして、横須賀の場合は様々な地域性があるので、ひとまとめにできない状況がある。やはり目指すべき学力というのは、先ほど石井委員がおっしゃった「家庭に」という視点も重要になる。ここでリニューアルしたリーフレットについて、事務局から補足の説明をしてほしい。

■事務局

今、追加で配付した資料の裏面になるが、「家庭と学校の学びをつなげる言葉かけ」というところを見ていただきたい。先ほどの太田委員からもあったように、子どもがのびのびと学んでいる学校には、心理的安全性がある。そこでよく飛び交っている言葉として、「なるほど」「そうなんだね」「たしかに」というものであることを紹介している。そういった言葉を使って、心理的安全性を担保しながら、子どもたちと関わっている学校の目標に関する数値は、概ね上昇していた。だから、家庭にも同じようなスタンスで、子どものことを見守ったり、寄り添ったりしてほしいし、子どもの思いに共感していきましょうというメッセージをリーフレットに込めた。これは「家庭学習啓発リーフレット」という名前ではあるが、先生方にもこういう言葉や関わり方を意識しても

らいたいと思ってもあって、このようなデザインになっている。昨年度の学力向上推進委員会の第3回目のときに、この内容について議論していただいた。これまでのリーフレットは「家庭でこのようなことをしてください」というようなことや、「何時間ぐらい勉強させてください」といった内容であったが、そうではなく、今まさに議論していただいているように、「学びとはどういうことなのか」ということを伝えるための一つのツールになるように意識して制作した。資料のオモテ面には、まずはこの絵のように「子どもが自分の好きなことから取り組んでみる」とか「実はその遊びの中にも、このような学びがしっかりとあるのです」ということが、家庭に伝わってほしいと願っている。

■委員長

昨年、各委員に見ていただいた内容になるが、このような形で教育委員会から発信しているため、この資料についても参考にしてほしい。

■西野委員

本委員会の委員を務めることになったときに、周りの人に「学力」について聞いてみたところ、「学力向上というと、テストの点数を上げていくということでしょうか」という反応が多かった。しかし、私は本委員会で取り組む学力向上は「テストの点数を上げる」だけを指すものではないと考えている。というのも、昨年度の議事録を拝読したが、その中にあった委員長の「教科の正答率だけを指しているのではなくて、学びに向かう力とか自己肯定感を含めて、子どもが学ぶ姿の全てを指すのが学力なのだ」という言葉に共感したからである。教育現場の先生方は、今日の議論のように、学力を「生きる力」とか「様々な資質・能力」と捉える方もいるだろうが、社会一般では保護者も含め「学力」と言えば「テストの点数や成績」と受け止めることが多いのではないかと。だからこそ、まず本委員会では「学力」の定義、横須賀市が目指す「学力」の定義をはっきりとさせた方がよいと考える。この定義付けがないと、今後の本委員会において、学力をめぐる認識のずれが起きたときに、議論の出発点に戻れなくなる恐れがある。

もちろん、「学力」について定義することは難しいと思うが、例えば、「普遍的な学力」、「先進的な意味の学力」、「地域性のある学力」という三つに分けてみるのはどうだろうか。この三つで考えてみると、一つ目の「普遍的な学力」は、論理的に物事を考える思考力・判断力・知識など、どの時代においても必

要な学力を指している。「今、この時代に必要な学力」ではなく、「時代や社会変化にかかわらず今までも必要で、学力の中でもベーシックな力」というのがあったはずである。それは現場の先生方が一番よくわかっていらっしゃると思う。

二つ目は、やはり様々な意味で時代は大きく変わっているなかで、先進的な意味の学力も求められているということだ。その一つとして、A I の活用がある。様々な仕事において、生産性や合理性、効率性なども含めて、A I は切っても切り離せない時代になってきている。私が所属する第一生命経済研究所で今年の3月に全国の18歳から69歳の1万人に対して「A I を日常的に使っていますか。」という調査を行ったところ、日常的に使っていると回答した割合は、全体で23%程度だった。ところが、18歳から22歳というZ世代に着目してみると、全体の倍近い42%程度が「日常的に使っている」と回答していた。その次の世代、まさに今議論している横須賀の小中学生の世代のことを考えると、さらにA I を日常的に使う割合が高くなる可能性があるだろうと私は予想している。横須賀市は、A I を教育現場に生かすということについても先進的な自治体だと聞いている。A I だけではなく、D X などを含めて、そういう先進的な技術が入ってくることに對して、児童や生徒はどう向き合い、どう使いこなしていくのかということも大事になってくる。それに関連して、情報を取捨選択する力などは、まさに先進的な学力の部分になるだろう。以上のことをふまえ、先進的な学力は、どういうものなのかということも議論しなければならないということが二つ目である。

三つ目は、地域性のある学力についてである。先ほど委員長がおっしゃっていたが、横須賀市だから必要な学力があるということと、今、委員の皆様のお話を伺っていると、「横須賀市」と言っても、一言ではくくれない地域性ということもあると感じた。市内にあるそれぞれの地域性をどのように分けて議論していくのかというのはなかなか難しいが、いずれにしても、こうした切り口を参考に、これから議論する「学力」は「どのような学力」のことなのかということ定義していくことが必要だと考える。

■委員長

具体的に議論を進める上での示唆をいただいたので、今後の議論の中で、是非このあたりは、取り上げていきたいと思う。

■宇佐美委員

西野委員がすごく丁寧にまとめてくださった後であり、今までの話を聞いてきての感想になってしまうが、追加で配られたこのリーフレットは、すごく印象に残っている。ここまで丁寧に つくって、保護者に訴えようとしていることを強く感じたからである。

本校では今年度、校内研究を立ち上げるときに「子どもたちに何を一番大切にするか」と考えた。そのときに、先生方が話していたのは「学び続ける力」ということで、それが一つのテーマとして挙げた。これは、これまでも出てきた「課題解決能力」に重きを置いている。子どもたちは、周りにたくさんの友達に囲まれながら、前向きなエネルギーの中で、課題に向かっていく。その中でいろいろなことを発見する環境があり、そして次の課題を見つけていくという「学び続ける力」をイメージしている。一方で、日常の先生たちの悩みとしては、粘り強く取り組む力がないということや、すぐに諦めてしまうということなどが出てきた。ここが、もしかしたらプリント学習とか「数値的な学力」の方の話なのだろう。前段に言ったことは、私達教員が一生懸命やってきた授業改善に関するところで、「この力を育てたい」ということ、先ほど話した先生たちの「日常的な悩み」に、齟齬があるのだろうと感じている。「数値的な学力」については、ICTの力で、個別最適な学びや、個々に応じた学習で、自分たちの持っている学校教育の時間で補えない部分を、何とか補完してくれる役割にならないののだろうかとも思っている。また、「学びに向かう力」を育てたいというとき、「ロバに水を飲ませられない」という言葉があるように、子どもたちが前向きな気持ちにならないと何もできないということがあ。教科等における授業改善ということも大切であるが、その学級の風土づくりということについても、重要視していかなければならないと思っている。

最後になるが、最初に指標の話が出たが、昨年度、質問紙調査を分析したときに、数値と教員の実感にずれが多くあったことを思い出した。数値がこんなに高く出ているのに、担任としては、そうは感じていない。また、逆もあって、こんなに子どもたちは頑張っているのに、なぜこういう自己評価するのだろうかということもあった。数値は、客観性のある一つの指標にはなると思うが、担任が肌で感じていることと、そのずれはどこから生まれてくるのかという分析を同時にしてかないといけないという話が、校内で出ていた。

■村上委員

アンケートの数値の話が出ているが、本校では、学校研究の中でキャリアパスポートを使った自己評価に取り組んでおり、年3回調査をしている。多くの子どもは、年度の後半に向かって、「自分がよりよくなりたい」という気持ちが数字に表れてくる。しかしその中で、宇佐美委員もおっしゃっていたようになぜこの子は自己評価をこんなに低くするのだろうか、と思うこともある。このことについては、いろいろな捉え方ができると思うが、例えば、その子が様々な経験をして成長して、その課題、その資質・能力に向き合えば向き合うほど、自分は本当にできているのだろうか、と、懐疑的になったことが数値に表れたのだろうと捉えることもできる。そのため、アンケートの取扱いについては、そのような子たちが一定数いるということ踏まえながら、見ていかないといけないと感じている。

次に、「学力」についてである。本校は教育課程に関する研究しており、学校の教育目標を九つの力に分け、先生方が同じ方向を向いて、資質・能力を育成していこうという取り組みをしている。その1番目は、「なりたい姿や成長に気づく力、目標を決めよう。こんなふうになりたいなと決めよう。」というものである。そして、先生たちが最後の9番目に設定したのは、「挑戦し、やり抜く力」である。当初は、この1番を経由しながら最終的に9番に向かうものと、イメージして研究をスタートしたが、実際にやってみると、「挑戦し、できたことを基に、また次の目標を決める」という姿や「9番から1番に戻る」という姿など、いろいろな姿が見られるということが分かってきた。研究の成果はこれから出てくるが、実感としては、9番も大事だけど実は1番がすごく大事であると思っている。去年は6年生を担当していたが、25人のクラスに7カ国の子どもがいた。当然、その子どもたちは日本語もそれ以外もおぼつかない状態であった。そうした中で、国語では『海の命』という単元に取り組んだときのことである。教室を見渡すと、1グループだけ英語でディスカッションが行われていた。グループでのディスカッションを終えて、各グループからの発表になったが、そのグループから出てくる意見がとても面白く、その意見を聞いていた子どもたちは「ああ、そういう切り込み方をするのか」と言いながら、さらに学びを深めている姿があった。そのとき私が思ったのは、その子たちには「言語という知識」がない中でも、必死に成長しようと食らいついてくる。必死にみんな学ぼうとしている。では、その子たちには何があったのだろうかと考えると、その子たちには明確な「夢」がある。「友達」がいる。「目標」がある。自分たちが学校で学ぶのは「自分が成長するために、プラスになることがあるからだ」という明確な目標を持っている子たちだった。だから分からないことがあっても、決して諦めない。板書を一生懸命ノートに

取りながら少しずつ日本語を覚えていく。まさに「知識」はないけれども、「目標」や「夢」があることによって、それを乗り越えていく姿を昨年見ることができた。周りの子たちも、そういった姿に刺激されて、個から全体の集団が育つような姿が見られた。ただ、それが学力テストや指標などで表れてくるのは、何年先なのだろうかとも思っている。私たちは「学力」を見ることはできない。その中で、今、「見える学力」、「見えない学力」ということで議論してきたが、この今の取り組みが「今すぐ評価できる力だけではない」とことをもう一度みんな認識しながら、まさに9年間の学びの中で、6年生の段階で調査をするのではなく、9年間の最後のタイミングで、その中学校ブロックの評価をすればいいのではないかとか、例えば、9年間の学びとか、もっと先の学びとして評価していくものだというような捉え方を、もう一度考えながら、目先の数値がよかった、よくなかったということに惑わされない、そういった「大きな学力」をみんなが共有していく方向性を確認していきたいと、今回の委員会の中で感じた。

■委員長

全員の思いをお聞きして、ようやく入口に少し近づけたと感じている。ここからが本当の話し合いになっていくが、皆さんたちもようやく「考えていく方向性や方法」というか「何をどう考えたらいいのか」ということが、少しずつ見えてきたと思う。大変恐縮ではあるが、今日お帰りになった後に、自分の考えを整理していただき、それを事務局の方に送っていただけるとありがたい。事務局はそのような対応は可能であるか。

■事務局

可能である。

■委員長

そして、これがまた次回の冒頭に今日話し合ったことを確認するとなると、そこでまた時間を要してしまうので、ぜひ、今日のこの議論したことが残っているうちに、ご自身の考えなどを整理していただきたい。また、今日の委員会では言い切れなかったこともあると思う。例えば、先ほど太田委員もおっしゃっていたように、「自分の学校ではこうだったのだ」というようなエピソード

も書いていただいても参考になる。自由にお書きいただき、自分は「学力」をこのように捉えたいというご意見をいただきたいが、よろしいか。

勝手にこのようなお願いをしてしまって申し訳ないが、皆様からいただいた意見をそのまま次回の会議に渡すのは、あまりにも無謀なので、私と副委員長の西野委員に一任をしていただき、ある程度こちらで整理する。それを次回の会議に提出するので、それをたたき台として捉えて検討してほしい。ただ、このたたき台をつくる材料は、皆さんから提示していただかないことにはできない。今日いただいた意見は十分に受け止めているので、次回に向けての流れをつくれるようにしたい。私の意見は、最終的に整理をする段階でお伝えすることとする。

最後に、次回に向けて二つ確認をする。一つは、冒頭でお話したように会議を1回増やすということである。日程調整は事務局にお願いする。二つ目は、今日の会議を踏まえて「学力」について皆さんたちの考えを出していただく。この二つのことを事務局には早急に対応してほしい。

以上で協議を終了する。

令和7年度



第1回 横須賀市 学力向上推進委員会

令和7年（2025年）7月23日（水）

教育研究所 第2研修室

【次第】

- 1 開会
- 2 教育指導課長あいさつ
- 3 委員委嘱ならびに委員紹介（自己紹介） 資料1
- 4 委員長選出 資料2
- 5 諮問 資料3
- 6 説明事項
今年度の学力向上推進委員会の取組について 資料4
- 7 協議事項
横須賀市が目指すべき「学力」とは、どのようなものか
- 8 連絡
- 9 閉会

（参考資料：『横須賀市学力向上推進プラン』 資料5）

令和 7 年度 学力向上推進委員および事務局名簿

(順不同 敬称略)

学識経験者	笠原 陽子	玉川大学 教師教育リサーチセンター 客員教授
学識経験者	西野 偉彦	第一生命経済研究所 ライフデザイン研究部 主任研究員
保護者代表	石井 雄一	横須賀市 P T A 協議会 会長
小学校校長会代表	安藤 聖	津久井小学校 校長
中学校校長会代表	太田 泰義	鷹取中学校 校長
小学校教頭会代表	宇佐美 あかね	衣笠小学校 教頭
中学校教頭会代表	山本 将弘	追浜中学校 教頭
小学校教員代表	村上 智彦	桜小学校 総括教諭
中学校教員代表	小日向 志帆	池上中学校 総括教諭
事務局	鈴木 史洋	教育指導課 課長
事務局	渡辺 真也	教育指導課 主査指導主事
事務局	石橋 由紀子	教育指導課 主査指導主事
事務局	黒澤 正道	教育指導課 主査指導主事
事務局	東 昭子	教育指導課 指導主事
事務局	大田 和美	教育指導課 指導主事

学力向上推進委員会条例

(設置)

第1条 市内における子どもの学力向上のための取組み等に関し、教育委員会の諮問に応ずるため、本市に地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の4第3項の規定による附属機関として、横須賀市学力向上推進委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、委員10人以内をもって組織する。

2 委員は、学識経験者、市立学校に在学する児童又は生徒の保護者、学校教育関係者及び教育委員会事務局の職員のうちから教育委員会が委嘱し、又は任命する。

3 委員の任期は、1年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第3条 委員会に委員長を置き、委員が互選する。

2 委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する。

(会議)

第4条 委員会の会議は、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、会議を開くことができない。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員会において必要があるときは、関係者の出席を求め、その意見又は説明を聴くことができる。

(その他の事項)

第6条 この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の同意を得て委員長が定める。

附 則

この条例は、平成25年4月1日から施行する。

令和 7 年(2025 年) 7 月 23 日

学力向上推進委員会委員長 様

横須賀市教育委員会

諮 問 文

下記に掲げる事項について、貴委員会のご意見を賜りたく諮問いたします。

記

1 諮問事項

現行プランの成果と課題を踏まえた次期「横須賀市学力向上推進プラン」(令和 8 年度から令和 11 年度)において目指すべき「学力」と、新たな重点目標及びその指標について

2 趣旨

本市では、児童生徒の確かな学力の定着を図るため、令和 4 年度から令和 7 年度までを計画期間とする「横須賀市学力向上推進プラン」を策定し、次の 3 つの目標を掲げて取り組んでまいりました。

「現行プランの 3 つの目標」

- 目標 1 学びあう集団の育成を図る
- 目標 2 粘り強く学ぶ力の育成を図る
- 目標 3 学力層全体の引き上げを図る

これらの取組を通じて、目標 1・2 については、教師の指導改善への意識や児童生徒の主体的に学習に取り組むことへの意識が高まるなど、一定の成果が見られました。一方で、目標 3 に関しては、全国学力・学習状況調査における本市の平均正答率が全国平均に届かない状況が続いています。

現行プランの成果と課題を踏まえ、令和 8 年度から令和 11 年度までの 4 か年を計画期間とする次期プランを策定するにあたり、①今後、本市が目指すべき「学力」とはどのようなものを明確にするとともに、②新たな重点目標の設定及び③次期プランの進捗管理に相応しい指標について、貴委員会の専門的かつ幅広い知見からご助言いただきたく、ここに諮問いたします。

以上

令和 7 年度 学力向上推進委員会の取組について（案）

1 今年度の取組の内容について

現行「横須賀市学力向上推進プラン」の期間満了に伴い、これまでの成果と課題を踏まえ、次期プラン（令和 8 年度～令和 11 年度）を本年度末までに策定する予定です。本市では、「学びあう集団の育成」「粘り強く学ぶ力の育成」「学力層全体の引き上げ」を目標に横須賀市学力向上推進プランを推進してきました。現行プラン期間に、主体的な学びの定着など一定の成果が見られた一方、学力等調査の教科調査の正答率が全国水準に届かないなどの課題も残っています。令和 8 年度～令和 11 年度に実施する次期プランの方向性について、横須賀市学力向上推進委員会の専門的な視点から審議をお願いします。

教育委員会は、貴委員会の答申を受けて、改めて検討を行い、令和 8 年度～令和 11 年度に実施する次期プランを策定します。

2 年間予定

本年度は次の内容で実施する予定です。

	日時	協議内容等
第 1 回	令和 7 年 7 月 23 日（水）	横須賀市が目指すべき「学力」とはどのようなものか （諮問 趣旨①）
第 2 回	令和 7 年 9 月 9 日（火）	時期プランの重点目標及び進捗管理に相応しい指標について （諮問 趣旨②・③）
第 3 回	令和 7 年 12 月 8 日（月）	次期プランの全体像の確認等①
第 4 回	令和 8 年 2 月 9 日（月）	次期プランの全体像の確認等②

※いずれも開会時刻は 15 : 00、開催場所は教育研究所第 2 研修室です。

横須賀市学力向上推進プラン

令和4年度（2022年度）～令和7年度（2025年度）



横須賀市教育委員会

目次

○はじめに・・ 1

 (1) 策定の趣旨

 (2) 基本方針

 (3) 前推進プラン実施の成果と課題による、これからの学力向上推進の方向性

第1章 横須賀市の学力向上に向けた目標および目標指標と、
 学力向上に向けた各学校の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

◇学力向上に向けた目標および目標指標の捉え方

目標1 学び合う集団の育成を図る

 <目標指標> ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

 ◆自己肯定感の向上

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

 <目標指標> ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

目標3 学力層全体の引き上げを図る

 <目標指標> ◆学力層の全体的な引き上げ

 ◆同一集団の経年変化の上昇

 ◆全国平均に到達

○目標・目標指標の一覧

第2章 横須賀子ども学力向上プロジェクトについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

 (1) 学校体制の確立に関する事業

 (2) 学習状況、体力状況の把握と指導改善に関する事業

 (3) 学習環境の整備に関する事業

 (4) 教員の指導力向上に関する事業

 (5) 学習機会の拡大に関する事業

 (6) 家庭学習の確立に関する事業

参考資料 横須賀市のこれまでの学習状況と分析について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

◇前推進プランの目標指標に基づいた分析について

目標1 全国学力・学習状況調査において、小学校6年生、中学校3年生
 ともに全国の平均正答率を目指す。

目標2 同一集団の経年変化に着目し、改善した状況を示す指数の上昇を目指す。

目標3 横須賀市立小・中学校学習状況調査(国語・算数/数学)において、
 平均正答率の度数分布、40%未満(A層)の割合の減少を目指す。

目標4 学習意欲と関連のある「自己肯定感」を示す設問において、同一集団の
 肯定的回答の増加を目指す。

目標5 学習意欲と関連のある「学習集団・学級集団」の状況を表す設問において、
 同一集団の肯定的回答の増加を目指す。

参考 横須賀市の学力向上に向けた取り組みの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

この横須賀市学力向上推進プランでは、学習状況調査について次のように記述しています。

・文部科学省が実施している「全国学力・学習状況調査」……………全国学力調査

・横須賀市が実施している「横須賀市立小・中学校学習状況調査」……………市学習調査

はじめに

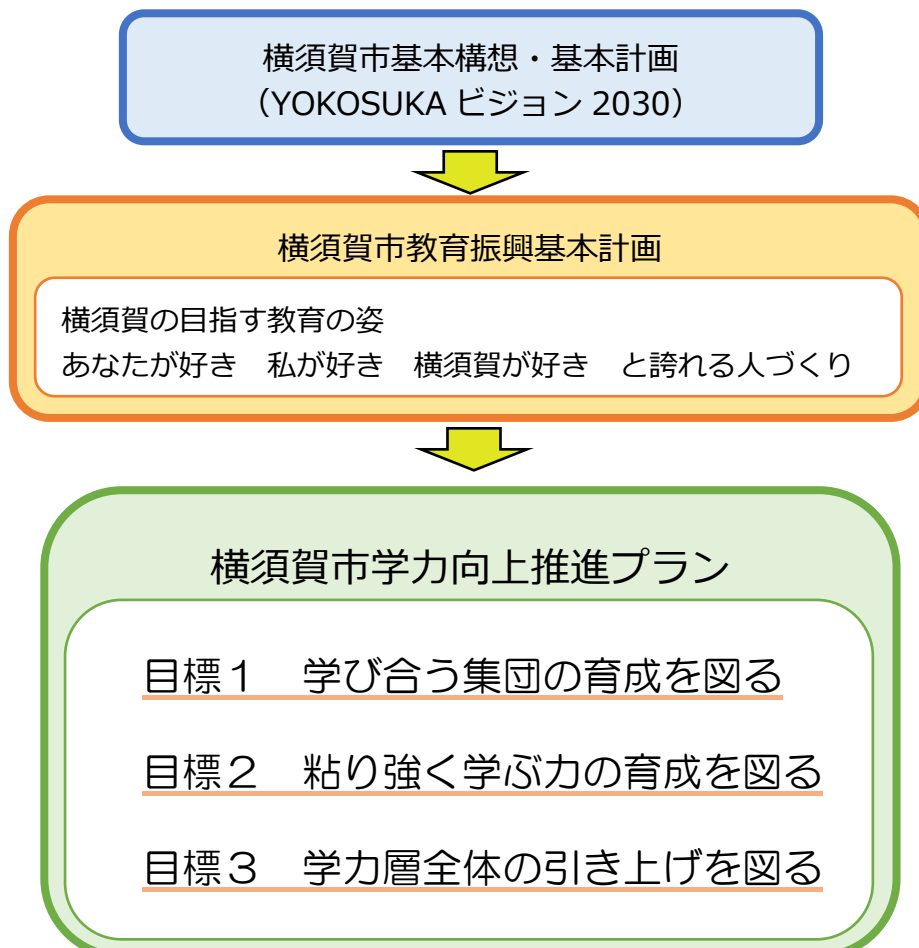
(1) 策定の趣旨

本市の学力向上に資する「横須賀市学力向上推進プラン」は、「横須賀市教育振興基本計画（令和4年度～令和11年度）」およびその「前期実施計画（令和4年度～令和7年度）」に基づく個別計画であり、本市の学校と教育委員会が児童生徒の学力向上のための目標および目標指標を共有し、今後、各学校が学校運営方針等に具体的な取り組みを計画し実施できるよう策定しました。

(2) 基本方針

- ① 本計画の目的は、「横須賀市教育振興基本計画」に示す、横須賀の目指す教育の姿「あなたが好き 私が好き 横須賀が好き と誇れる人づくり」を実現するための基本的な方針「自立心と主体性のあるより良い社会の創り手を育てます」の柱である「確かな学力」を育成することです。
- ② 本計画は、令和2年度の「学力向上推進委員会」が示した「学力向上推進プランにおける目標①から⑤に係る検証について」の答申と、令和3年度の「学力向上推進委員会」が示した目標および目標指針に基づいて策定しています。
- ③ 本計画の期間は、令和4年度から令和7年度とします。

学力向上推進プランの位置付け



(3) 前推進プラン実施の成果と課題による、これからの学力向上推進の方向性

平成30年度から実施した学力向上推進プランの目標の検証において、市の児童生徒の学力の状況について、「学年が上がるにつれて学力の向上が見られ、子どもの学力は発達段階にしたがって育成できている」ことや、「一定の割合で学力に課題のある児童生徒が存在しており、その割合が減少していない」ことが分かりました。

そのような状況を受け、今後の市における学力向上の取り組みの方向性として、次のような視点を重視することとしました。

- ・児童生徒の個に応じた指導の充実を図るとともに、全ての児童生徒が授業の内容を理解し、授業に主体的な態度で臨むことができる指導方法の工夫・改善を行うこと。
- ・授業の中で、児童生徒が自己を生かしたり、他者に対して共感したりしながら学びを深めることを通して、自己肯定感の醸成を図ること。
- ・他者の意見をふまえて自分の考えを表現したり、一歩進んだ課題に向かっていこうとしたりすることで学びが深められるような、探究的で協働的な授業実践を行うこと。
- ・学びに対してあきらめずに粘り強く取り組もうとする力や、うまくいかないことも工夫して達成しようとする力など、学びに向かう力の育成を図ること。

このような視点からの取り組みを進め、各学校における学力向上の推進を図るために、新しい学力向上推進プランの目標を次のとおり設定しました。

目標1 学び合う集団の育成を図る

全ての児童生徒が、授業に主体的な態度で臨むことができ、互いの意見を尊重し合いながら、協働し学びを深めていける学び合う集団の育成を図る。

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

これまでに習得した知識および技能や、身に付けた思考力、判断力、表現力等を児童生徒が自ら活用し、学びに対してあきらめずに粘り強く取り組もうとしたり、うまくいかないことも工夫して達成しようとする学びに向かう力の育成を図る。

目標3 学力層全体の引き上げを図る

目標1、2の視点による授業実践や指導の改善にくりかえし取り組むことで、全ての学力層の引き上げを図る。

第 1 章

横須賀市の学力向上に向けた 目標および目標指標と、 学力向上に向けた各学校の 取り組みについて

学力向上に向けた目標および目標指標の捉え方

目標1 学び合う集団の育成を図る

<目標指標>

- ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上
- ◆自己肯定感の向上

目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

<目標指標>

- ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

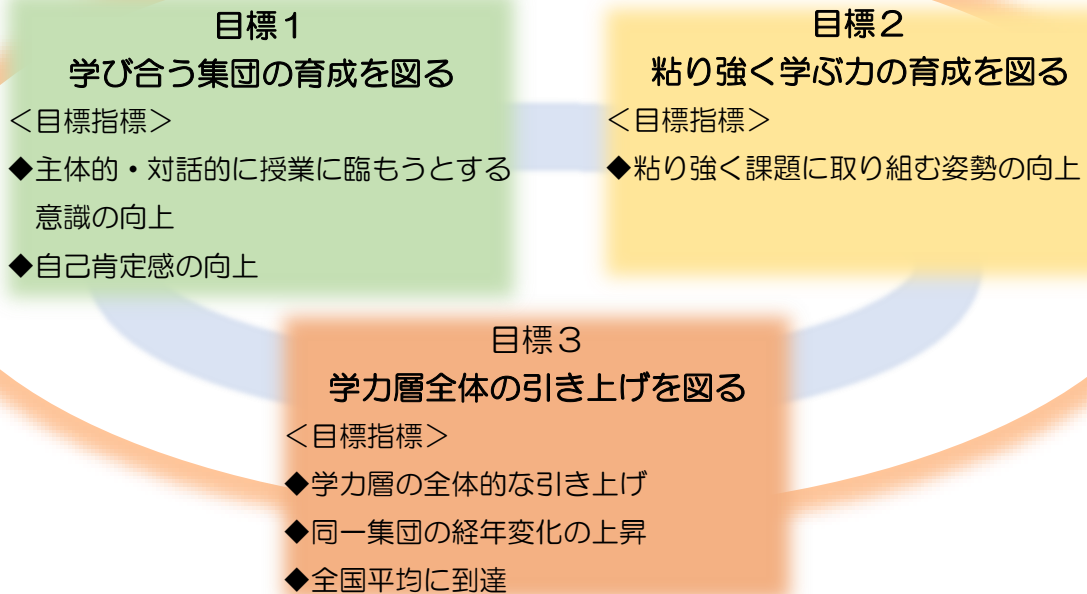
目標3 学力層全体の引き上げを図る

<目標指標>

- ◆学力層の全体的な引き上げ
- ◆同一集団の経年変化の上昇
- ◆全国平均に到達

学力向上に向けた目標および目標指標の捉え方

前推進プランの目標指標の分析（参考資料「横須賀市のこれまでの学習状況と分析について」）に基づき、これからの横須賀市の学力向上に向けた取り組みの目標および目標指標を次のように定めました。



3つの目標の捉え方

変化が激しく、予測困難な時代においても通用する「確かな学力」を身に付けるためには、学びに対して主体的に取り組み、自分の良さや個性を生かすとともに、他者の多様な価値を認め、協働し合うような経験が大切です。また、自らの学びを調整したり、あきらめずに粘り強く学ぼうとしたりする力の育成が重要になります。

目標1では、児童生徒が主体的・対話的に臨み、自分のことを大切な存在だと実感できるような授業づくりを通して、**学び合う集団の育成**を図ります。目標2では、難しい課題に対しても工夫して解決しようとする経験や、一人でもあきらめず課題にチャレンジする経験を積むことを通して、**粘り強く学ぶ力の育成**を図ります。この目標1・目標2の視点による授業実践や指導の改善を繰り返すことによって、学び合う集団の育成や、児童生徒一人一人の力の育成が図られ、目標3の**学力層全体の引き上げ**につながっていきます。

3つの目標はそれぞれが独立しているわけではなく、密接に関連合っています。3つの目標のつながりを意識して、各学校の実情や児童生徒の状況に合わせた取り組みを進めましょう。

目標1

学び合う集団の育成を図る

●● 目標について ●●

「学び合う集団」とは、児童生徒が自分の良さや可能性を認識して個性を生かしつつ、多様な他者を価値のある存在として尊重し、仲間と協働して様々な課題を解決していく集団です。

「児童生徒が主体的・対話的に授業に臨む」「児童生徒が自分のことを大切な存在だと実感できる」という視点を持ちながら授業をつくることで、児童生徒の学びに向かう意識や自己肯定感が高まります。このような授業によって「学び合う集団」の質が向上し、児童生徒の学びを深めます。

● 学力向上に向けた各学校の取り組みについて ●

児童生徒が主体的・対話的に臨む授業づくり

児童生徒の学力向上においては、児童生徒が学びを自分事として捉え、主体的・対話的に授業に参加しようとする意識を高めることが大切です。それが、知識および技能の習得や、思考力・判断力・表現力等の育成へとつながります。

児童生徒の意識を高めるには、例えば、グループワークや話し合い活動を目的や状況に応じて取り入れ、自分の意見を表現したり他者の意見に共感したりしながら、自分の考えを広げたり深めたりすることができた実感するような場面が必要です。

また、自分たちで課題を設定し、仲間と解決しようとするような、探究的で協働的な単元・題材計画を立てることも効果的です。このような学習経験を通して、新しい考え方や他者と関わることの良さに気づき、自らの学びを深めることができたという手応えを積み重ねることで、次の学びへの意欲を引き出します。

児童生徒の学び合い、高め合おうとする意識を向上させるために、互いの意見を尊重し合いながら、協働し、学びを深める授業を実践していきます。

自分のことを大切な存在だと実感できるような授業づくり

これまで市が行った意識調査や市学習調査の質問紙調査の結果から、自己肯定感と学習意欲には相関があることが明らかとなっています。

児童生徒の自己肯定感を高めるには、「認められている」と実感するような経験が

重要です。誰かが発した疑問や意見について、みんなで真剣に考えたり、共感したりするような授業づくりが大切です。

特にグループワークや話し合い活動では、何のために話し合っているのか分からないような状況にならないように、活動のねらいに即した支援を行い、他の児童生徒と意見交換したり、協議したりできるようにすることが大切です。また、「こんなことを言ったら、『間違っている』と否定されてしまうのではないか」と不安にならないように、それぞれの個性や学び方を尊重し、全ての児童生徒の自己肯定感を高める授業づくりを行います。

目標指標 ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

市学習調査（小5・中2）

「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」

「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」

指標	基準値	目標値
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る

目標指標 ◆自己肯定感の向上

市学習調査（小5・中2）「自分のことを大切に思うことができるか」

指標	基準値	目標値
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る

目標2

粘り強く学ぶ力の育成を図る

●● 目標について ●●

授業においては、教師の指示や説明に沿って展開するだけの指導や、正解にたどりついたかどうかという視点だけで児童生徒を評価している、「粘り強く学ぶ力」の向上は図れません。

これまでに習得した知識および技能や、身に付けた思考力、判断力、表現力等を児童生徒が自ら活用し、挑戦しがいのある課題に対して最適解を見出そうとチャレンジする学習経験と、一人一人が試行錯誤しながら学ぶ姿に焦点を当てた学習評価が、児童生徒の「粘り強く学ぶ力」を育てます。

● 学力向上に向けた各学校の取り組みについて ●

難しい課題に対しても工夫して解決しようとする経験

「難しい課題」とは、児童生徒の可能性や能力を一步高めるような挑戦的な課題です。粘り強く学ぶ力の向上を図るためには、そのような課題に対してもあきらめずに工夫して解決しようとするような経験を積ませることが重要です。

探究的な学習活動や協働的な体験活動を通じて、児童生徒自身が、それまでの学びを振り返り、次の学びへの見通しをもったり、より良いものを目指して試行錯誤したりするような、学びを調整する場面を含む単元・題材計画や、評価計画が必要です。その学びの過程での教師による評価（授業内での言葉がけや、ノートへのコメント等）や、その学びを通して得た成功体験は、自己肯定感の向上を支えます。

一人でもあきらめず課題にチャレンジする経験

市学習調査の結果の分析から、「目的や意図に応じて、理由を明確にししながら、自分の考えをまとめて書く」ことについて課題があることが分かりました。一人一人の児童生徒がどのように解答しているのかを分析してみると、無解答率の高さが顕著となっています。

グループで課題を解決する学習活動においても、個々の学ぶ力がどう向上している

かを見取することは大切です。グループ活動に入る前に、自分なりの考えをまとめてみることや、グループ活動が終わった後で、自分の考えの変容や友だちから学んだことを一人一人が言語化することも重要です。

そして時には、これまで学んだことを使って自分一人の力で取り組む課題も必要です。その場合、たとえ課題の解決にはたどり着けなくても、粘り強く考え、これまでの学びを生かしてチャレンジしようとした姿勢を積極的に評価しましょう。そうした経験を繰り返すことで、一人一人のあきらめずに学びに向かう力が向上します。

目標指標 ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

市学習調査（小5・中2）「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」

指標	基準値	目標値
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年、その前年度を上回る

市学習調査（小5・中2）「記述により解答する問題の無解答率」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5・中2の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を下回っているか。	小4・中1時の無解答率	毎年、その前年度を下回る

目標3

学力層全体の引き上げを図る

●● 目標について ●●

目標1・目標2の視点による授業実践や、指導の改善を繰り返すことによって、学び合う集団や児童生徒一人一人の力の育成が図られ、結果として目標3の学力層全体の引き上げにつながっていきます。

3つの目標はそれぞれが密接に関連し合っています。目標3の数値結果を分析する際には、目標1・目標2の取り組みとのつながりの中で児童生徒の姿を見つめ直し、児童生徒一人一人の学習状況に応じた指導の改善につなげ、学力層全体の引き上げを図ります。

● 学力向上に向けた各学校の取り組みについて ●

個に応じた指導の充実

学力層の全体的な引き上げを図るためには、目標1・2に示したような授業改善を進めつつ、個に応じた指導の充実を図ることが重要です。

児童生徒の学びを1時間単位ではなく、単元や題材全体を一連の学びとして捉え、長期的な視点で一人一人の学び方に目を向ける指導が求められています。

個に応じた指導の充実に当たっては、児童生徒や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などを取り入れること、ICT等教材教具の活用、教職員間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善が必要です。

また、難しい課題に対して挑もうとしたり、一人でもあきらめず課題にチャレンジしたりしようとする児童生徒に寄り添い、つまずきそうなことを予想しながら適切な支援を行うことは、一人一人の学びの成功体験を支えます。

同一集団の経年変化を追い、各学年の状況を分析

同一集団の経年変化を追うことで、児童生徒の学習集団としての成長を可視化し、長期的な視点から指導の成果や課題を捉えることができます。調査を行う全ての学年において、前年度からの学習集団としての成長を分析することが重要です。

各学校においては、各学年における学力向上の取り組みの成果や課題を分析し、児

児童生徒の実態に合わせた指導の充実や改善を図ります。

なお、これまでの市学習調査の結果では、小4・中1の学習内容に課題が生まれる傾向があります。そのため、小4・中1の内容を取り扱う小5・中2時の調査の結果については、特に丁寧な分析が必要です。

また、小中一貫教育に関する取り組みにおいて、全国学力調査および市学習調査の結果を交流し課題やその解決策を見出す中で、小学校高学年と中学校1・2年生の学習を一体として捉えた取り組みを行うことも重要です。

全国との比較による、身に付けている学力の定着状況の確認・分析

全国学力調査では、学習指導要領の理念・目標・内容等に基づき、全ての児童生徒に身に付けさせるべき内容を調査問題として出題しています。全国的な児童生徒の学力との比較をすることで、身に付けさせるべき内容の定着状況を確認・分析するために、目標指標として設定しました。

各学校においては、平均正答率が全国の平均に到達しているかどうかの分析だけでなく、設問ごとに正答率の分析を行い、全国の状況と大きくかけ離れている設問や、例年、学校の中で課題として捉えている設問について検証を行うなどし、指導の充実や改善を図ります。

目標指標 ◆学力層の全体的な引き上げ

市学習調査（小5・中2）「正答率40%未満の児童生徒の割合」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5・中2の正答率40%未満の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値(小4・中1時)を下回っているか。	小4・中1時の割合	毎年、その前年度を下回る

市学習調査（小5・中2）「正答率80%以上の児童生徒の割合」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5・中2の正答率80%以上の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値(小4・中1時)を上回っているか。	小4・中1時の割合	毎年、その前年度を上回る

目標指標 ◆同一集団の経年変化の上昇



市学習調査（小5・中2）

「市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度の数値を上回っているか」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5・中2の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値(小4・中1時)を上回っているか。	小4・中1時の割合	毎年、その年度を上回る

*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

目標指標 ◆全国平均に到達



全国学力調査（中3）「国語・数学が、全国の平均正答率に到達しているか」

指標	基準値	目標値
全国学力調査にて、中3の国語・数学が全国の平均正答率に到達しているか。	中3の全国の平均正答率	全国の平均正答率を上回る

学力向上推進プラン

横須賀の全ての児童生徒に「確かな学力」の育成を図る

目標1

学び合う集団の育成を図る

目標指標

◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

◎市学習調査にて、小5・中2の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」「みんなで課題を解決する場面で、協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っている。

◆自己肯定感の向上

◎市学習調査にて、小5・中2の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っている。

目標2

粘り強く学ぶ力の育成を図る

目標指標

◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

◎市学習調査にて、小5・中2の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っている。

◎市学習調査にて、小5・中2の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を下回っている。

目標3

学力層全体の引き上げを図る

目標指標

◆学力層の全体的な引き上げ

◎市学習調査にて、小5・中2の正答率40%未満の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を下回っている。

◎市学習調査にて、小5・中2の正答率80%以上の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っている。

◆同一集団の経年変化の上昇

◎市学習調査にて、小5・中2の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っている。

*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

◆全国平均に到達

◎全国学力調査にて、中3の国語・数学が全国の平均正答率に到達している。

第2章

横須賀子ども学力向上プロジェクトについて

(1) 学校体制の確立に関する事業

(2) 学習状況、体力状況の把握と指導改善に関する事業

(3) 学習環境の整備に関する事業

(4) 教員の指導力向上に関する事業

(5) 学習機会の拡大に関する事業

(6) 家庭学習の確立に関する事業

(1) 学校体制の確立に関する事業

事業① 学力向上推進委員会の設置

学識経験者、保護者代表、学校代表で構成された学力向上を推進する委員会です。本市の学力向上の取り組みに対する成果・課題の検証や、これからの取り組みの方向性、その方向性をもとにした「学力向上推進プラン」の作成などの諮問を受け、答申を行います。

令和3年度は、令和2年度の答申を踏まえ、今後の学力向上に向けた取り組みの目標、およびその達成度を測る目標指標を設定するなどし、本推進プランを作成しました。

事業② 教育フォーラムの開催

横須賀の目指す教育の姿「あなたが好き 私が好き 横須賀が好き」と誇れる人づくりを実現するためには、教育委員会だけでなく、学校・家庭・地域で認識を共有し、互いに協力しながら、それぞれの役割を果たしていくことが大切です。

教育フォーラムを通して、横須賀市の教育への理解を深めるとともに、学校・家庭・地域のさらなる連携を図ります。

(2) 学習状況、体力状況の把握と指導改善に関する事業

事業③ 横須賀市立小・中学校学習状況調査

児童生徒が自身の学習状況を把握し、学習意欲を高めること、また、各学校が児童生徒の学習状況について把握、分析し、調査結果を指導方法の工夫・改善に役立てることを目的としています。

児童生徒の読解力や表現力などを中心とした学習状況の把握を行うために、調査する教科を見直し、国語、算数／数学の2教科で実施するとともに、児童生徒質問紙調査を実施しています。

各学校は、調査結果の分析を行い、課題を明らかにし、学校体制での学力向上の取り組みにつなげています。

教育委員会においては、調査結果の分析を行い、市全体としての課題を明らかにし、施策・事業につなげています。また、指導主事が各学校の調査結果をふまえて、学力向上に関わる指導・助言を行っています。

事業④ 横須賀市児童生徒体力・運動能力、運動習慣等調査

小学校3年生から中学校3年生を対象とし、新体力テストの集計および、運動習慣等の質問紙調査を実施することで、児童生徒が自身の体力状況を把握することで、運動への意欲を高めるとともに、横須賀市の児童生徒の体力状況を把握、分析することで、学校の指導改善につなげていきます。

(3) 学習環境の整備に関する事業

事業⑤ GIGAスクールのさらなる推進

小中学校の児童生徒に1人1台配置された端末を積極的に活用して、1人1台端末が安心して活用できる環境の確保や、各学校の状況に応じたICT環境の整備、ICT支援員の配置などを行い、ICT機器を活用した効果的な学習の推進を図ります。

事業⑥ 学習支援員の派遣

全ての児童生徒が主体的に授業に参加できるようにするため、学習支援員を各学校に派遣し、教職員と連携しながら、学習状況に課題の見られる児童生徒などに対して、その子どもの特性に合わせた方法での学習支援を行います。

事業⑦ ALT・FLTの配置

市立小学校、中学校、高等学校にALT（外国語指導助手）および中学校、高等学校にFLT（外国人英語教員）を配置し、ネイティブ・スピーカーと直接触れ合う時間を設けることで、外国語学習の充実を図ることを目的としています。小学校、中学校、高等学校の12年間で、国際都市横須賀の将来を担う、子どもたちの国際コミュニケーション能力を育成していきます。

事業⑧ 学校司書の派遣

横須賀市の児童生徒の実態として、不読率の高さが課題となっています。学力向上においては文章を粘り強く読み解く力としての読解力や、自分が興味を持ったことに対し主体的に学びを深めようとする姿勢の育成が重要であり、それは読書と大きく関わります。そこで、市内の学校図書館の充実のために、学校司書を全校に配置していきます。学校図書館の環境整備や学校図書館を活用した授業の補助を行うこと、司書教諭や図書館ボランティア等と連携し、児童生徒が主体的・意欲的に読書活動に取り組むことを目指します。

(4) 教員の指導力向上に関する事業

事業⑨ 指導力向上のための研修開催

教育研究所では、教員の基本研修において、それぞれの経験年数に応じた授業づくりについての研修を行い、指導力の向上を図っています。また、校外研修とともに、「ペア・グループ研修」という校内研修を課しています。経験年数の少ない教員については、先輩教員とペアまたはグループとなり、先輩教員の授業を参観し、振り返りを行ったり、作成した指導案をもとに自身の授業を参観してもらい、研究協議を行ったりするなど、先輩教員からの指導・助言によって、授業技術の伝達を受け、指導力の向上を図っています。

事業⑩ 研究助成事業

児童生徒に、より「確かな学力」を育むことができる授業づくりには、教育研究は必要不可欠です。学校単位で教育研究に取り組むことで、教職員の資質向上とともに、学校の活性化につながります。本市では、市立の学校全てに研究助成を行っています。フロンティア研究校は、本市の教育課題に対し、教育委員会が指定した内容について、先進的にその解決を図るための実践研究を行い、広くその成果を全市に発信します。チャレンジ研究校は、各学校の教育課題に対する研究に取り組み、学力向上、学校教育の活性化、教職員の指導力向上を図ります。

事業⑪ 教科等指導員の配置

横須賀市の小学校および中学校における教科等の指導改善と教育水準の向上を図るため、各教科の専門性の高い教員を教科等指導員として委嘱しています。教科等指導員は模範授業の公開を実施し、その教科等の指導における重要な視点やポイントを授業実践の形で示し、参観した教員の指導力向上に貢献しています。

事業⑫ 小学校低学年授業アドバイザー

小学校低学年担当の経験年数の少ない教員を対象に、小学校低学年授業アドバイザーを配置し、授業づくりおよび特殊性のある低学年への指導方法を支援することにより、教員の指導力向上を図ります。

事業⑬ 次期中核教員の育成

各学校における次期中核となる教員を育成することにより、学校全体の授業力向上を図り、児童生徒の学力向上につなげることを目的とした事業です。授業実践を中心として、校内の人材育成を担う学校の中核となる教員に対し、指導主事が、定期的に学校を訪問し、他の教員の授業を中核教員とともに参観し授業のポイント等について協議したり、中核教員の授業の観察やその内容の協議をしたりして、授業力の向上を軸にした育成を行っていきます。

(5) 学習機会の拡大に関する事業

事業⑭ チャレンジアップ支援事業

市内の中学校在学・市内在住の中学生を対象に、漢字検定・数学検定・英語検定の準2級以上の検定料を助成し、高い目標を持ち、意欲的・主体的に学習に取り組むことを目的に、中学校の学習内容にとどまらない、一歩進んだ学習内容へチャレンジしようとする意欲の喚起を図ります。

事業⑮ 土曜科学教室

小学生を対象に実験・観察を通して科学の面白さを感じ、理科を学ぶ意欲を高めることを目的として開催しています。横須賀市にゆかりのある企業等に講師委託し、専門的な講師から理科につながる内容を学ぶことで、より深い学びとなっています。

(6) 家庭学習の確立に関する事業

事業⑩ 家庭学習啓発リーフレットの配布

家庭学習や生活習慣を充実させることで、学力向上を目指したリーフレットを作成・配布しています。小学校および就学前の保護者を対象とし、家庭学習の取り組み方や子どもとの関わり方について、説明しています。

事業⑪ 家庭学習の応援

児童が自発的に家庭学習に取り組み、日常的な家庭学習の習慣を身に付けることで、学力向上を図ります。自ら進んで家庭での学習を行えるよう、家庭学習の計画表として「家庭学習がんばりカード」を作成し、イントラネット上に掲載しています。



**あなたが好き 私が好き 横須賀が好き
と誇れる人づくり**

横須賀市学力向上推進プラン

令和4年度（2022年度）～ 令和7年度（2025年度）

策定年月 令和4年（2022年）3月

策 定 横須賀市教育委員会

（担当 教育委員会事務局学校教育部教育指導課）

〒238-8550 横須賀市小川町11番地

TEL：046-822-8479 FAX：046-822-6849

E-mail：gu-bes@city.yokosuka.kanagawa.jp